

# 悪夢再び。立嶋、新鋭・佐久間に完敗す！

▼パンチでダウンを奪い、流れば立嶋に傾いたかに見えたが……。



▲左ハイでダウンを奪った直後の佐久間の猛ラッシュ。スタンディング・ダウンを宣告されてもおかしきはなかった。



▲勝利を告げられた佐久間は両手を挙げ、観客にアピールした。この自信に満ちあふれた表情を見よ！



▲佐久間の蹴り足をつかんで押し込みながらのローは確実に決まっていたのだが……。



▲本気のタイ人が放つ、本気のミドル。グライガンワーンは小野寺の実力を知った上で総力戦を挑んできたのだ。



▲通常戦が通じぬと見るや、小野寺はすぐさま後ろ廻りなどの変速攻撃に転じた。せめて一矢報いてくれ……！

だが、マスコミの中でも一部の専門家の下馬評は意外にも「佐久間有利！」であった。もちろん、立嶋が初対決の日本人やサウスポーとの対決に自分が悪いというデータもあつたが、それ以上に佐久間がこの試合に向けて鬼気迫る猛練習を積んでいたと聞いたからだ。その成果は入場時に佐久間が見せた、自信あふれる表情からも明らかだ。

試合はガードを固めてパンチで応戦するが、立嶋はガードが下がるとは矯正されておらず、逆にパンチをかわされてしまう。佐久間のコンビネーションは左アッパーからの右フックと、左ミドルからまっすぐ入る左ストレートなどが有効打となり、立嶋に容易にペースを握らせない。

だが、立嶋も意地を見せる。4Rには得意のローとパンチでダウンを奪い、流れば立嶋に傾いたかみえた。しかし、佐久間は起死回生の左ハイでダウンを奪い返し、意識もうろうとする立嶋をコーナーでめった打ちにしたのだ。

最終ラウンド。左右連打でさらにダウンを奪った佐久間は倒せるチャンスがあったにもかかわらず、立嶋の反撃を恐れて前に出るこたがでず、そのまま終了し、レフェリーはダウン数で1つ上回る佐久間の勝利を告げた。勝った佐久間は「4Rまではよかったが、5Rで逃げてしまった。狙ったパンチはよく当たったが、追い込みながらのパンチは防衛されてしまったので60点の出来です」と、快挙にそぐわぬ冷静なコメントを残している。一方の立嶋はいつもの調子で淡々とコメントしていたが、進退問題を問われると、「今は結論は出せない」と即答を避けた。エースの落日の瞬間を見た思いがする。

○**グライガンワーン・スナイプ・フレイ・タイ**  
【判定3-0】  
小野寺 力(自勝) X

横浜文化体育館での交流戦で、前田耕作を判定で下したのは昨年3月のことだった。以来、日本キック協会のエースとして日本タイトルを奪取し、外国人選手を次々と撃破してきた小野寺だが、その相手は強豪と呼ぶには値せず、唯一の強豪と言えるマイケル・リニュー・ファットとの試合も流れたまま、打倒ムエタイを宣言せざるを得なかった。

相手のグライガンワーンは谷山ジムのコーチを勤めるタイ人である。コーチとはいえずラジヤダムナン・J・ライト級4位にまで上りつめたムエタイ戦士。しかも、来日後は高津広行、須藤信夫、五十嵐ヨシユキらに圧勝しており、その実力は今なお健在である。

1Rから強烈な右ミドルを放つグライガンワーンに小野寺はパンチを浴びせるが、すぐに捕まり膝蹴りでダウンを奪われる。小野寺の有効打はアッパーだが、首相撲の疲労もあつてか効果は半減。逆にグライガンワーンの右ミドルは衰えず、無敗の快進撃を続けてきた小野寺は無念の初黒星を喫してしまった。

敗れた小野寺は「甘かった。初ダウンは息を吸った瞬間にみぞおちに膝蹴りを食らったから、首相撲をやられていたうちに腕が疲れてパンチ力がなくなっちゃった。完敗です」と言っており、悔し涙を見せた。

セコンドがしきりに「ムエタイ」と叫んでいたように、グライガンワーンがムエタイの誇りを賭けて小野寺を叩き潰してきたことは明白だった。事実、日本人との戦いでローブを背負わず、最終ラウンドまでアクレシブに攻めたタイ人を見るのは久しぶりだ。

そのグライガンワーンを相手にして、一歩も退くことなく、幾度もダウンを奪われながらもその都度立ち上がり、試合を捨てずに最後まで戦い続けた小野寺の闘志は見事である。問題は、キック界の至宝とも呼ぶべき小野寺の試合をなかなか組むことができなかった興行側にある。若い小野寺にはもっと経験を積ませるべきところを、興行が組めないこと逆で試合動を鈍らせてしまう結果となつてはいないだろうか。

目黒ジムにはかつて、タイ人を相手に16度もダウンを喫し、病状返りにされながらも不屈の闘志で立ち上がり、キック界を黄金時代に導いた男がいる。小野寺にもその先賢を習得して、打倒ムエタイを成し遂げてほしいものだ。その先賢・沢村忠のように……。